

ボランティア活動と奉仕活動

ある公共機関のボランティア活動をしている方々への感謝の集いで、講演する機会を得た。ボランティア活動と、奉仕活動の違いについて、触れたつもりである。

奉仕活動とは、既にあることにお手伝いするというように、どこか消極的なニヤンスがある。一方、ボランティア活動とは、既にあること、状況さえも変えていくというように積極的な要素を含むべきと私は考えている。こうした考えからすれば、今しきりにボランティア活動と云われてるものは、殆どが奉仕活動ではないだろうか。奉仕活動をボランティア活動に改革して欲しいというのが、講演の趣旨であった。

ボランティアとは、一般に、「主体性」、「無償性」、「福祉性」と定義されているが、私は更に、「自己追求性」を加えたい。「福祉性」というと、何だか(あまりこうした表現は使いたくないが)いわゆる社会的弱者の問題を対象にするもののように考えられがちである。

本来ボランティアの語源は「志願兵」であるように、ボランティア活動は、自己判断・選択し、自己責任において行動することである。そして、その判断基準は、自らの「幸せ」を求めるいうところにあるだろうと思う。つまり、福祉の語源が「幸せ」であることから、決して社会的弱者への奉仕だけでなく、ボランティア活動とは、自らの「幸せ」を追い求める行為ということにもなる(「自己追求性」を加えたいというのはこうした意味であり、「福祉性」が本来の意味で解説されるなら、あえて「自己追求性」を加える必要もないが)。故に、ボランティア精神とは、日常の自己の精神活動にまで昇華しないと意味がないと云える。

では、なぜ人はボランティアとして、社会的弱者の問題を対象としがちであるのかということである。それは、人と相対して初めて自らがよく見えてくるように、社会的弱者の問題と関わることで、初めて自らの生活している社会の未熟性が、また自らの人としてのあり様がよりはっきりと見えてくるということだろうと思う(意識しない内に、自らの「幸せ」を追い求めているのであろう)。そして、自らも含め、周りの方々と共に「幸せ」に過ごせる社会とはどういう社会かを考え、「社会的弱者」という言葉が不必要となる社会を協力して作るために、その取り組みへの機会となるのがボランティア活動と、私は位置づけたい。

(2002年11月05日記)